

そわにえ  
Soigner



第10号

「Soigner (ソワニエ)」とは、「世話をする・手当てする」という意味のフランス語です。

2007年7月15日発行

発行/東京訪問看護ステーション協議会 (責任者 森山弘子)  
〒162-0815 東京都新宿区筑土八幡町4-17  
社団法人東京都看護協会内  
TEL : 03-5229-1534・1520 / FAX : 03-5229-1524

INDEX /	ステーション紹介…⑤
さんぼみち……………①	From a user……………⑥
協議会総会報告……………②	編集後記他……………⑧



「夏の北アルプス」 横山誠之院長撮影



「看護は要—ある筋萎縮性側索硬化症の患者さんを通して」

(墨田区) 横山内科神経内科 院長 横山 誠之



先日、訪問診療所に勤務されているK先生と話しをする機会がありました。私が訪問していたALS患者さんの奥さんがK先生に長く診てもらっていました。来院された時に夫が亡くなった経緯を語り、訪問看護師さんに親身な世話を受け、色々な相談にも気軽に応じてもらい、本当にありがたかったそうです。また、K先生は訪問診療を看護師さんとしているので、「彼女たちはよく勉強するね」とほめていたのが印象に残っています。

訪問看護ステーションが設立された頃から、神経難病の患者さんの訪問診療を依頼されることが多くなりました。私達の役割は、患者さんが自宅より良い生活が保てるように支援する事だと思えます。そのためには多くの専門家達の協力と意思疎通が必要だと痛感しました。はじめは、患者さんの家族も交えて検討会を開いて、関係者の意思統一を図りました。今では地域での顔見知りが多くなり、電話やメールなどで意見交換がスムーズに運ぶようになってきました。

そのALS患者さんの介護者は奥さんだけでした。奥さん自身も病気を抱えており、断腸の思いで「お父さん、家でさまざま

な装置をつけて生活すると、私が先に死んでしまうかもしれない」と話したそうです。

積極的な医療を施さないことに患者さんが同意し、家族、在宅関係者も再確認しました。徐々に症状が悪化してくると、何も出来ずに訪問診療をするのが心の負担になってきました。途中で見ていられなくなり、訪問看護師さんに相談せず「経鼻胃管を入れましょうか?」と患者さんに話し、ステーションの所長さんから勝手に方針変更しないよう意見されることもありました。そのうち意識が少しずつ遠のき、数日間でロウソクの火が消えるように息を引き取りました。師走も押し詰まった日の午前3時でした。木枯らしの吹く中を自転車で患家に向かいました。看護師さんもすでに到着していました。奥さんは、自宅で最期まで過ごせるよう支援してくれた皆様に感謝していました。

在宅療養では「看護が要」と常々考えています。看護師さんが自転車をこいでいる姿をよく見かけます。自分の健康にも気をつけて、「雨にも負けず、風にも負けず、雪にも夏の暑さにも負けぬ、丈夫な体を持ち」頑張っていたいただきたいと思います。